

通して行う。

会長のやりたい事を会員全員で盛り上げて満足感を出す。夫婦同伴の地区大会出席率を上げていく。

市民の認知度は疑問、他人に説明できない事もある。国旗掲揚の事業は継続していく。パワフルでエンジョイできるRCになるように何かしら花火を上げていく。例会出席が途切れがちなので健康大事と考え、出席率を上げていく。

第2班 5月9日(木) 赤星亭 責任者:土田会員  
発表者:草桶会員 出席者:竹内紀昭会員、宇野会員、  
宮前会員 計5名



武生RCは、毎年、しくら賞、インタークト後援、武生商業高校・武生東高校の出前授業の奉仕をしていますが、私達の地域の方との目に見えるような奉仕があつても良いのではないか。

特に武生RCは来年度60周年を迎えるに当たって、お金だけで済ますことではなく、汗を流す事をして、市民に認知され、この奉仕で会員増強の弾みになれば一石二鳥になると思います。2年前の前回の次年に向けての炉辺会合で、寺子屋の話が幾つかの班で出ていましたが、今一度考えて見てはとの全員の意見でした。これは、地域の方特に親たちを巻き込んでの奉仕になるのではと思います。

ガバナーの方針で奉仕に継続性をと言っておられますが、武生RCでは計画を早く立て期日までに報告し、財団の補助を得るために早めに立案して行かなければならぬが、これがまた次年度への良い連携になるのではと思います。

第3班 4月22日(月) 神崎家 責任者:白崎弘康会員  
発表者:西藤会員 出席者:山田会員、白崎裕二会員

計4名

●ロータリアンの原点である「職業奉仕」の理念に立ち戻り取組みを進めよう。

・武生ロータリークラブは、比較的安定した活動が続けられている  
・クラブの自主性を最大限尊重した活動を  
・クラブの最大の目的は「親睦」にある  
・個々人は「職業奉仕」の理念に沿って日常の中で社会貢献を果たしていくことが大事  
・ウイ・サーブとアイ・サーブの考え方があるが、ロータリーの本質はアイ・サーブではないか  
・世界の流れがポリオ撲滅運動に象徴されるように

ウイ・サーブに重きを置くようになってきているが、違和感を感じる面もある。

- ・地域の活動についても、本来は会員それぞれの事業、職業の中での活動が第1義であるが、クラブとして一定の社会奉仕活動に取り組むことも大事である。
- ・ただ、クラブとして目立った奉仕活動がないとしてもそれ自体は問題ではない。
- ・最大の地域貢献は経済の活性化に寄与すること。
- ・ロータリーアンの魂を持って、考え、行動する一年でありたい。

#### ●次年度の事業展開について

- ・来年度は60周年節目の年度となる。
- ・これまでクオーターを重点的な周年記念にしてきているので、大がかりな式典等は予定されないと聞いているが、60周年記念事業委員会で考えているネパールジョムソン訪問に、クラブ全体としても力を入れていくことが望ましい。
- ・その際には、出発点となった林ガバナー時代からの『リンゴの樹』構想の取り組み経緯も説明が必要と考える。(果樹→収益→教育資金)
- ・事業には最大限ナマステ基金を活用し、今後継続的な支援は無理だととも今の時点できることに取り組む事が望ましい。
- ・そのうえで林ガバナーの墓前に報告することができると考える。

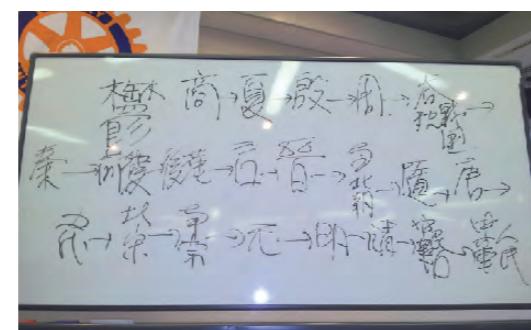
#### ニコニコ箱 …… 39,570円

- 増永良英(功労会員)  
○佐々木会長 ○高橋俊雄 ○三田村久治  
○辻岡俊三 ○内藤義介 ○米岡房直  
○三村昌之 ○斎藤真理子 ○三嶋悦子

#### 武生RC事務取扱内規改正について

当クラブ事務取扱内規(A)を改正する件につき、5月7日の理事役員会に於いて審議され、5月21日の例会に於いて佐々木会長の説明があり会員各位の拍手多数による賛同が得られた。

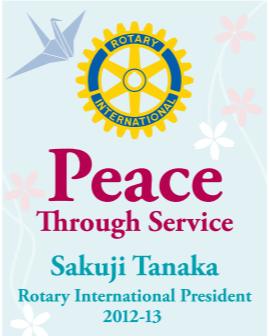
#### 感心させられた三田村久治会員の卓話



「老ロータリアンの憂鬱」 平成24年11月6日

ROTARY INTERNATIONAL DISTRICT 2650

2013.5.28 No. 2282



# TAKEFU WEEKLY



## Rotary Club of Takefu

Bridge the Gaps

2012-2013 第2650地区テーマ  
隔たりをなくそう

創立/1954年(昭和29年)6月30日

事務局/〒915-8522 越前市塚町101 武生商工会館内

TEL.0778-23-5210・FAX.0778-22-2333 E-mail:takefurc@es.ttn.ne.jp

例会日/毎週火曜日 例会場/武生商工会館

会長/佐々木忠彦 幹事/河嶋一 会報委員長/丹羽新吾

#### 第2867回 例会記録 平成25年5月21日(火)

会員総数59名(内出席免除会員6名) 本日出席会員37名

メークアップ(前々回) 6名

出席率(前々回補正) 83.64%

ロータリーソング「それでこそロータリー」

#### 会長挨拶 佐々木会長



本日は24節気の「小満」です。陽気が良くなり、草木などの生物が次第に生長して生い茂るという意味です。早くも沖縄では14日に梅雨入りが発表されました。平年よりも少し早い時期だそうです。

先週の日曜日の安養寺の山の手入れには、沢山の会員のご協力により作業が大変進みました。一時間半だけの作業でしたが、私も大変疲れました。大変ご苦労様でした。又草刈り機とオーバーの贈呈も行いました。大変喜んでおられました。その後の昼食のバーベキューは久しぶりに沢山の肉や野菜がテーブルに並べられ、見た目でお腹一杯になりました。

ある朝刊の中根東里の言葉の記事を紹介します。

「出る月を待つべし。散る花を追うことなれ。」

中根東里は徳川時代に存在したあらゆる学者のなかで、最も清貧に生きた人です。驚くべき思想の高みに達しながら、世に知られず、今日まで埋もれている不思議な人物です。

その文章は卓絶です。まず高名な儒学者荻生徂徠が彼を激賞しました。江戸中に名声が広まり、博士たちは皆「慶元(徳川創始時代)以来、稀有絶無」と驚嘆、その文才を羨みました。だから幕府や大藩の儒者となり高禄を食むものだと思われていました。ところが、彼は学問で禄をもらおうとしたかった。長屋にこもり、食のあるときは書を読み、食が尽き

れば履物を作て市で売り、小銭を得た。人々は彼を「皮履先生」と呼びました。同じ長屋に病人が出て、貧しくて薬がないと知ると、大切にしていた書物をことごとく売って与えたと言われています。

そんな風だから貧しさはどこまでも彼を追いかけました。52歳の時、栃木の佐野で村塾を開いていた彼のもとに弟が来ました。「難産で妻が死に、育てられない」と3歳の幼女を置いていきます。東里は独り身。人生50年の時代、老い先も短い。自分が死ねば、この子はどうなるか。幼女を膝に抱き、彼は遠くを見つめます。そして筆をとって書いたのが冒頭の言葉です。彼の塾の壁書のなかの一つです。

この言葉は人生の全てに当てはまります。人生において歓喜の瞬間は短いです。大切な人の別れも来ます。しかし、桜は散っても、月は必ず出ます。それを待つ時間をどのように生きるか。母を失ったあどけない幼女を抱きしめ、この清貧の村儒者は、そのことを言い聞かせようとしていたのでしょうか。

今日の一言:「刻苦精進。」

「出る月を待つべし。散る花を追うことなれ。」

#### プログラム

#### 炉辺会合報告

テーマ「次年度に向けて」



米岡クラブ運営委員長

第1班 5月9日(木) 飯田 責任者:玉村会員

発表者:石本会員 出席者:三田村久治会員、石川会員、

小林会員、佐々木会長、

藤井会員、倉橋会員 計8名

武生RCも60年を迎えて、老齢期に入り諸問題がある。事業に関して、地区・市民・他団体を巻き込んだ協同事業を年間を

